

新 版

# 高原町の文化財

2001年3月

宮崎県西諸県郡  
高原町教育委員会



韓国岳より霧島連山を望む



狭野神社杉並木(大正13年12月9日国天然記念物指定)



祓川神楽(昭和49年12月4日国選択無形民俗文化財指定)のうち『十二人剣』  
(永松敦 撮影)



狭野神楽(昭和61年4月1日町無形文化財指定)のうち『踏剣』



苗代田祭(平成11年9月27日宮崎県無形民俗文化財指定)



狭野の棒踊り(平成10年4月1日町無形文化財指定)

新 版  
高原町の文化財

2001年3月

宮崎県西諸県郡  
高原町教育委員会

## 序 文

高原町では、21世紀を迎えた今日、高原町の歴史を解明するという目的で、『高原町史資料編』を作成していく所存であります。その足掛かりとして、高原町の文化財のガイド的な位置にある『高原町の文化財』を作成しました。

以前にもこういった書物が作成されましたが、すでに内容が古くなり、又、近年の新発見・研究の進展などがあったため、今回、新訂として作成した次第です。

勿論、当書に掲載されている文化財が、町内に所在する文化財全てではありません。特に、馬頭観音や民俗行事については、今のところ、調査が進んでいないため、今回は、掲載を見送りました。今後の調査の進展により、判明する事柄もあると思いますので、これから先も、こういった形で刊行していきたい所存であります。

最後になりましたが、この本を作成するにあたり、地元の方々に大変お世話になりました。この場を借りまして、心から御礼を申し上げます。

今後の当町の文化財保護行政に対するご指導・ご協力をいただきますよう、よろしくお願い申し上げます。

平成13年3月

高原町教育委員会

教育長 正入木 久 男

## 例 言

1. 本書は、平成12年度高原町ふるさと振興事業補助金によって作成した。
2. 本書に関わる現地調査及び執筆・事務は、高原町の文化財改訂委員会が行った。組織関係者は、次の通りである。

### 高原町の文化財改訂委員会

委員長	正入木 久 男(高原町教育委員会 教育長)
事務局長	久保田 芳 人(高原町社会教育課 課長)
事務局次長	篠原 弘 二(同 係長)
事務	大 學 康 宏(同 主事)
現地調査員	地 村 光 男(高原町文化財保護調査委員会 委員長)
	牧 喜 純(同 委員)
	石 原 潤二郎(同 委員)
	伊 達 寛 之(同 委員)

3. 本書の編集・執筆は、大 學が行った。写真についても、一部を除いて、大 學が撮影した。

## 本 文 目 次

第1章	高原町の歴史	1
第2章	史跡・天然記念物	9
第3章	町内の埋蔵文化財	11
第4章	神社・仏閣・建造物	14
第5章	有形文化財	25
第1節	石碑・石造物	25
第2節	仏 像	30
第3節	庚 申 碑	33
第4節	田の神像	37
第6章	無形民俗文化財（民俗芸能）	43
第7章	註釈	46



# 第1章 高原町の歴史

## 高原町の歴史

宮崎県西諸県郡高原町は、霧島連山の南西部にある高千穂峰の東麓に位置します。町域は、東西約18km、南北約10km、面積85.38km<sup>2</sup>、全体的に東西に長く、中央部がくびれています。霧島連山を鹿児島県との県境に持ち、南東部は鹿児島県霧島町、南部及びその周囲は宮崎県都城市・北諸県郡山田町・高崎町、町北部を流れる岩瀬川を境に西諸県郡野尻町・小林市とそれぞれ接しています。町の中心部は、岩瀬川の支流である辻の堂川の南方、標高約200mの台地にあります。

高原町では、天孫降臨及び神武天皇説話が多い町ですが、調査が進んでいないことや、シラス等の火山灰が非常に分厚いため、古い時代の事はわからないのが現状です。

今のところ、縄文時代早期(約9000年前)辺りから、小規模ながらも人が住み始めましたようです。しかし、約6400年前に降下したアカホヤ火山灰(薩摩半島沖鬼界カルデラ噴出物)やウシノスネローム(高千穂峰の噴出物?)に覆われたため、この後はしばらく人の居ない状態が続きました。そして、縄文時代中期から後期(約3000年前)には各地に集落が作られ、人口も増加します。この時期は、主に、九州一円・四国・瀬戸内等の地域と交流があったようです。

そういった幅広い交流・人口増が弥生・古墳時代まで続きます。特に、古墳時代には、近畿



高原町俯瞰図

地方との繋がりを示す遺物が発見されるなど、近畿の中央政権と何らかの関係が持たれていました。しかし、古墳時代後期(6世紀前半頃)を境に人口が減少し、律令体制の支配下では、古代の幹線道路である西海道から外れていたため、次第に広葉樹林の豊富な山林へと変わりました。平安時代初頭(9世紀後半～10世紀前半)には、大規模な造成が至る所で行われ、畠が作られますが、ごく短期間で放棄され、今度はススキなどが生息する原野となりました。この頃は、「高原」という地名は見られず、『倭名類聚抄』<sup>(註1)</sup>に記載されている「諸縣郡春野郷」が現在の高原に該当すると思われます。その後、10世紀半ば、比叡山の僧侶性空上人<sup>(註2)</sup>が霧島山に入り、修験道場の基礎が作られました。

その一方で、集落が営まれることはあまりなく、鎌倉時代初頭には、猪や鹿などの狩り場になりましたが、文暦元年(1234)の霧島山の大噴火により、周辺の寺院をはじめ当地一帯が壊滅的な被害を被りました。

中世は、税所氏、真幸院(現在のえびの市近辺)の北原氏、日向国の伊東氏、島津氏の勢力争いの場となりましたが、天正4年(1576)、伊東氏の守る高原城を島津氏が攻め落としたことにより、島津領となりました。以後、明治時代に至るまで、島津氏の支配下に置かれました。

江戸時代は、薩摩藩外城の一つとなり、麓地区(当初は花堂村)には地頭仮屋が置かれました。当初の高原郷の範囲は、現町域に加え、前田・大牟田・江平・縄瀬・笛水村(現高崎町)でしたが、延宝8年(1680)、高原郷から一部が分離、高崎郷が作られた際に、小林郷から広原村が、野尻郷に吸収された紙屋郷から水流村(現都城市)が、それぞれ編入され、麓・蒲牟田・後川内・広原・水流村が新たな高原郷となり、この状態が幕末まで続きました。

明治16年(1883)に宮崎県が設置されると、同年に北諸県郡、翌17年(1884)には西諸県郡に所属しました。その後、明治22年(1889)の町村制施行に伴って高原村が成立、昭和9年(1934)の町制施行に伴って高原町となり、現在に到ります。

## 「高原」の地名と説話

高原町には、神話にちなんだ地名が数多く残っています。「高原」という名称も、『三国名勝図會』<sup>(註3)</sup>には、

土俗傳へ云、當邑を高原と號するは高天原の略称なりと、凡日向国内此辺は、神代の皇都に係り、今に都島[都島は今の都城]、高城などといへる地名残るも此が為にて、此地、都島と接し、平砥曠邈、土壤膏腴、土俗の伝亦従ふべし、・・・

とあることから、古くからこういった地名やその由来が、伝承として残されていたことがうかがえます。

又、高原町は、神武天皇が東征以前に居住していたという伝承があります。『日本書紀』<sup>(註4)</sup>には、「神武天皇の幼名の一つに狭野尊がある」と書かれていることから、こういった伝承が生まれました。高原町には現在も、

- (1) 皇子原<sup>おうじばら</sup>・・・神武天皇が生まれた所。
- (2) 産場石<sup>うべし</sup>・・・神武天皇が産まれる時、産湯を使用した所。
- (3) 御腰掛石<sup>うへし</sup>・・・神武天皇が腰をかけるのに使用した。
- (4) 血捨木<sup>ちしやのき</sup>・・・神武天皇が産まれた時、そのけがれを捨てた所
- (5) 祓原・・・神武天皇が産まれた時のけがれを祓った所。
- (6) 祓川・・・神武天皇がお祓いをする際に使用した所。
- (7) 皇子滝・・・神武天皇が幼少の時に遊んだ所。
- (8) 皇子港・・・御池にあり、同じく幼少の時に遊んだ所。
- (9) 都街道・・・宮の宇都と皇子原の往還道路
- (10) 宮の宇都・・・神武天皇一族の住居跡。
- (11) 狭野渡・・・宮を発した後、最初に川を渡った所。
- (12) 迎・・・東征に向かう神武天皇一行を住民が出迎えた所。
- (13) 馬登・・・神武天皇が、住民から献上された馬に乗って坂を登った所。
- (14) 鳥居原・・・東征に向かう神武天皇を、住民が鳥居を建てて見送った所。

などの伝承地があります。



皇子原



皇子原神社裏の産場石



宮の宇都



都街道



狭野渡



迎



馬登

## 霧島山と霧島六所権現

霧島山は、昭和9年(1934)3月に「霧島屋久国立公園」として国の指定を受けた、日本最初の国立公園です。高千穂峰・新燃岳・御鉢・中岳・夷守岳・韓国岳等がありますが、それらを総称して「霧島連山」と呼んでいます。これらの中で、最も標高が高いのが韓国岳(1700m)ですが、これら霧島山の中心となっているのが、高千穂峰(1574m)です。

いつから「高千穂峰」と呼ばれたかは定かではありませんが、古くは、霧島山(霧島鉾嶽)と言えば高千穂峰を指していたことが『三国名勝図會』より窺えます。

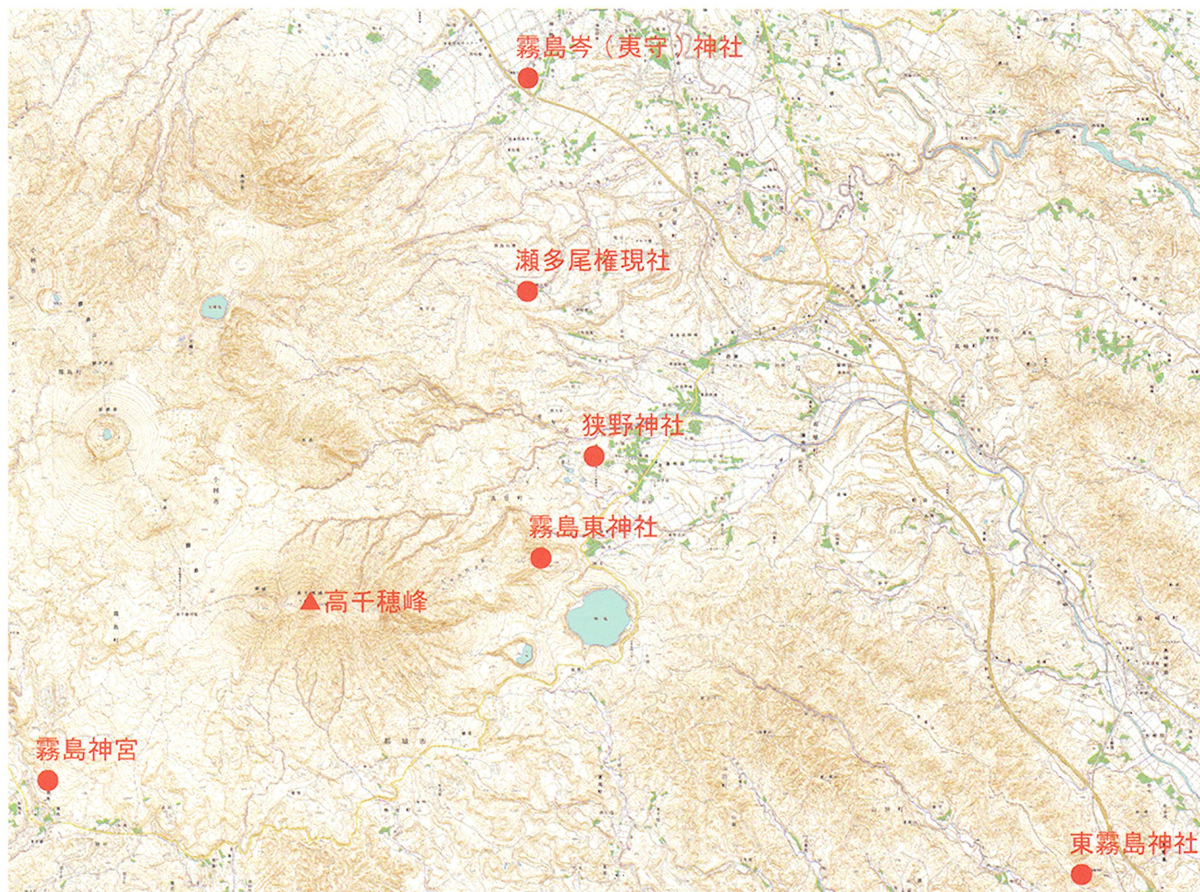
『続日本後紀』<sup>(註5)</sup>では承和4年(837)に従五位上、『日本三代実録』<sup>(註6)</sup>では天安2年(858)に従五位上から従四位下に昇格した際、「霧島岑神」の名が見られます。又、長門本『平家物語』<sup>(註7)</sup>では、鹿ヶ谷の陰謀に加担した藤原成経が、治承元年(1177)に鬼界島へ流罪になるくだりで、霧島山に触れた記述があります。そこでは霧島山を、

ひとつの峯高くそびえて、煙りたえさぬ所あり、日本最初の峯、霧島のだけと号す、金峰山、しゃかのだけ、富士の高根よりも、最初の峰なるが故に、名付けて最初の峯といふ、六所権現の霊地なり、

と表現しています。

霧島山が修験道の道場として注目されたのは、比叡山の性空上人がこの地で修行したのが最初と云われ、この時に霧島六所権現の基礎を造ったとされています。

霧島六所権現の比定については、諸説ありますが、『三国名勝図會』には、



霧島山と霧島六所権現位置図

旧社名	現社名	所在地	別当寺
西御在所霧島六所権現社	霧島神宮	鹿児島県霧島町田口	華林寺
雛守六所権現社	夷守神社	小林市大字細野	宝光院
霧島山中央六所権現社	霧島岑神社	小林市大字細野	瀬戸尾寺
霧島東御在所両所権現社	霧島東神社	高原町大字蒲牟田祓川	錫杖院
狭野大権現社	狭野神社	高原町大字蒲牟田狭野	神徳院
東霧島権現社	東霧島神社	高崎町東霧島	勅詔院

(なお、霧島岑神社は、夷守神社と同一神を祀っていたことから、明治7年、夷守神社の敷地に遷宮、2社を合祀して、新たに霧島岑神社となりました。)

と記されています。しかし、実際に霧島六所権現が史料に登場するのは、15世紀初頭辺りなので、中世の島津氏の庇護下に入ってから霧島六所権現みくじの存在が重要性を帯びるものと思われます。

特に中世は、度々寄進等を受け一方で、「御みくじ」という、島津氏の政策決定で重要な位置を占める作法が行われるなど、島津氏の中で重要度が増し、六所権現に名を連ねる寺社には、多大な寄進が行われました。

又、霧島山は、上記のような繁栄の一方で、今に至るまでに、相当数の噴火を繰り返してきました。特に文暦元年(1234)・享保元年(1716)の大噴火では、近隣の社寺等が全て焼失し、壊滅的な打撃を与えたと云われています。

「火を噴く山」「分水嶺」という2つの性格を持つ霧島山、特に高千穂峯は、江戸時代辺りからは、「オタコ、オタコサマ」と崇拝され、多くの参拝者が訪れました。参拝の際には、身体を清め、必ず新しい草履に履き替えて、稲穂を携えて登りました。

霧島山に登る道は、『三国名勝図會』によれば、錫杖院から登る「二ツ石路」と、神徳院から登る「龍駒路」の2ルートがあり、「龍駒路」は緩慢だが長距離のため、急峻だが距離の短い「二ツ石路」がよく使われたようです。



東霧島神社(高崎町)



夷守・霧島岑神社(小林市)



霧島神宮(鹿児島県霧島町)

## 御池

御池は、霧島山系の中でも最大の火口湖で、周囲4.3km、水深が100m前後あり、火口湖として日本で最も深いとされています。



皇子港より御池・高千穂峰を望む

『三国名勝図會』によると、御池のまわりには、松・軀瀬・皇子・劔崎・刈茅・柳・護摩壇、7つの港があり、そのうち、護摩壇港には、性空上人が護摩を焚いたという伝承があります。現在そこには、性空上人の石像が置かれ、参拝する人が跡を絶ちません。



護摩壇港の性空上人石像



## 第2章 史跡・天然記念物

### 1. 狭野神社杉並木(大正13年12月9日国指定天然記念物)

狭野神社の参道沿いにあります。指定当時は100以上あり、遠く離れた所からでも見えたようですが、指定後、度重なる台風や白蟻被害によって大半が倒れ、現在はわずか12本を残すのみとなりました。

由来については、慶長15年(1600)前後に、島津義弘の命を受けた新納忠元(薩摩国大口城主)が、当時の神徳院住持である宥淳法印の助力を得て、朝鮮出兵の凱旋祝いとして植えられたのが始まりと伝えられています。

### 2. 狭野神社仏法僧繁殖地(昭和9年5月1日国指定天然記念物)

同じく狭野神社参道内にあります。仏法僧は、主に冬、南方から飛来する鳥ですが、昔はよく見られたそうですが、狭野杉の現象により、ここ最近では飛来する姿も見られなくなりました。

### 3. 高原古墳(昭和9年12月15日宮崎県指定史跡)

皇子原公園の敷地内にあります。指定されているのは6基ですが、周囲には、同じような土饅頭が多く見られます。早くに指定されたため、墓の時期及び内部の状態は不明ですが、諸県特有の古墳形態である地下式横穴墓と思われます。



高原古墳(写真は4号墳)

## 4. 高原城址

大字西麓字西城戸にあります。別名松ヶ城とも云われ、標高約200mの、北方に突き出た台地の先端部を利用して作られています。周囲に巡っている標高差約40mの谷を天然の堀とし、縄張りの残る「本城」と東南部の細長い台地「下柵」で構成されています。

高原城は、当初、永禄年間に島津家臣梅北掃部が築いたとされ、その後伊東義祐の領地となり、伊東四十八城の一つに数えられていましたが、天正4年(1576)8月の島津氏攻略後は、高原・小林・須木など周囲一帯が島津氏の支配下に入りました。その後上原尚近等が城主となりましたが、日向一帯が島津氏の領地となったことによって戦略的価値が消失、元和元年(1615)頃には廃城となりました。

現在、本丸と伝承されている区画は現在墓地となっており、館を意識したような方形の縄張りになっています。城内の殆どが山林化していますが、本城部分の大半が残されています。



高原城址現況



高原城址内の土塁

## 5. 高原地頭仮屋址

地頭仮屋は、江戸時代、薩摩藩の郷(外城)制度の中で郷の政務を司る役所のことです。当初は、花堂の坂元寺本殿に置かれていましたが、その後、現在の遍照寺の辺りに位置していたと云われています。

薩摩藩では、藩内各地に郷(外城)を設置し、その長である地頭を鹿児島から派遣するという郷制度を取り入れていました。高原もその一つで、関ヶ原の戦に従軍した新納旅庵や入木院又六・お由羅騒動で流罪となった名越左源太等が地頭として赴任しました。しかし、多くの場合は他の役職との兼務であったようで、赴任しなかったり、居地頭といって数箇郷まとめて一人の地頭が責任者となっていたこともありました。そのため、高原郷もしばしば地頭不在が続いたため、地頭が不在の場合は、地元より選出された噺(あつかい)役等が職務を代行しました。

明治時代以降、跡地は高原小学校となり、その後遍照寺が移転し、現在にいたります。

## 第3章 町内の埋蔵文化財

### 6. <sup>ひもり</sup>日守地下式横穴群(平成10年4月1日高原町指定史跡)

大字後川内字日守の、ちょうど高原町と高崎町の境に分布している遺跡です。昭和54・55年の造成により次々と発見され、宮崎県教育委員会により発掘調査されました。これまでに、家屋構造の束柱に相当する彫刻を施したもの(54-1号墓)や、壁や天井に塗朱したもの(55-2号墓)がありました。副葬品は鉄製武器や工具の他、装着された状態の貝輪等がありました。又、平成9年2月に発見された墓(97-1号墓)からは、町内では初めての蛇行剣が発見されました。蛇行剣は近畿地方を中心に出土している祭器であることから、近畿地方の中央政権と何らかの繋がりがあったと思われます。

時期は、5世紀前半から6世紀の前半辺りと思われます。



日守97-1号墓検出状況



日守97-1号墓蛇行剣検出状況

### 7. <sup>あさひだい</sup>旭台地下式横穴群

大字広原字南鞍懸にありました。昭和50年(1975)11月、牧野改良の整地中に13基発見され、宮崎県教育委員会により発掘調査が行われました。発見された地下式横穴墓の中には、彫刻や朱で表現された束柱や棟木等、家屋構造を表現するものがありました。墓の構造による墓の位置の違いが見られました。

### 8. <sup>たちきり</sup>立切地下式横穴群

大字後川内字立切にありました。昭和62年12月の入木地区圃場整備の作業中に発見され、同年12月及び63年4月の2度にわたって調査されました。その調査で、地下式横穴墓72基、土坑2基、土器溜2ヶ所などの遺構が検出されました。ここでも、彫刻や朱で表現された棟木・垂木・束柱がありました。又、これに伴って出土した人骨が76体、副葬されていた鉄製品や農工具・貝製品・玉類などが合わせて288点出土しました。

これまでの地下式横穴墓がまとめて出土した例はなく、集団による墓群の構成・墓前祭の可能性等の検討が行われました。



立切地下式横穴群の竪坑分布状況



立切3号墓玄室内人骨

## 9. あらかこ 荒迫遺跡

大字広原字荒迫にありました。宮崎フリーウェイ工業団地造成のため、平成7年1月から平成9年3月まで、宮崎県埋蔵文化財センターにより発掘調査が行われました。

この調査では、平安時代初頭に耕作されたと思われる畝跡が調査区全面から検出された他、弥生時代から古墳時代にかけての住居跡等も発見されました。平安時代の畝がこれだけ広範囲に検出されたのは、初めてのことです。

## 10. かわよけ 川除遺跡

大字後川内字川除・脇藤にありました。後川内小学校の体育館建設のため、平成9年9月から11月にかけて、町教委により発掘調査が行われました。



川除遺跡畝遺構



川除遺跡道路遺構

調査区からは、平安時代初期の畝の跡や中世の道路跡が検出された他、縄文時代前期から平安時代の土器や石器・鉄鏃の他、「洪武通宝」<sup>(註8)</sup>という貨幣も発見されました。この調査により、この辺りでも縄文時代前期から集落があったことや、平安時代初頭のほぼ同時期に町域で一斉に開拓が行われたことが判明しました。

## 11. 梡粉山遺跡

大字蒲牟田字狭野にありました。狭野地区の圃場整備に伴い、平成11年11月から平成12年12月にかけて、町教委により発掘調査が行われました。調査区からは、平安時代初頭の畠跡、鎌倉時代初頭から15世紀頃にかけての狩猟用の陥し穴が検出された他、縄文土器や石器・平安時代の土師器が大量に出土しました。出土した縄文土器は2万点にのぼり、四国や瀬戸内地方の文化の影響が見られます。又、中世の陥し穴については、これまで発見例がなく、全国初とも言えます。



梡粉山遺跡陥し穴出土状況



梡粉山遺跡畠遺構出土状況

## 第4章 神社・仏閣・建造物

### 1 2. 狭野神社

祭神 神倭伊波礼彦天皇・吾平津姫命・天津彦彦火瓊瓊杵尊・彦火火出見命  
彦波瀲武鸕鷀草葺不合尊・木花開耶姫命・豊玉姫命・玉依姫命

大字蒲牟田字狭野にあります。旧称を狭野大権現社と言います。第5代孝昭天皇の時に創建されたと云われていますが、康保3年(966)、比叡山の僧侶である性空が霧島山に入り、修行の後に霧島六所権現社の一つとして建てられたのが始まりとされています。

霧島山の麓にあるため、度々噴火のために焼失していましたが、文暦元年(1234)の大噴火により社殿などが全て焼失し、一時は東霧島神社勅詔院(高崎町)へと移転しました。

天文12年(1543)、島津貴久の命により神徳院住持舜恵が高原麓の鎮守神社敷地へ移転、慶長15年(1610)、島津家久の命により、神徳院住持宥淳が狭野原の旧地(現在地)を整備、慶長17年(1612)12月28日、狭野御神体を狭野に移しました。その後は管理者が不在のため荒廃しましたが、江戸の寛永寺で修行していた憲純(小林郷出身)により再び社寺が修復され、宝永3年(1706)には遷宮式が行われ、鹿児島からは、藩主の名代等が出席しました。

享保元年(1716)9月から翌年1月にかけての新燃岳噴火により再び焼失し、夷守神社の別当寺である宝光院へと逃れた後、享保6年(1721)には元の地に復しましたが、享和3年(1803)に焼失したため再び宝光院に移転しました。



狭野神社

### 1 3. 霧島東神社

祭神 伊弉諾尊・伊弉冉尊・瓊瓊杵尊・彦火火出見命・鸕鷀草葺不合尊・豊玉姫命・木花咲耶姫命・玉依姫命・神武天皇

大字蒲牟田字祓川の、高千穂峰の東側の中腹にあります。旧称を霧島東御在所両所権現社と言います。第10代崇神天皇の時に創建されたと云われていますが、狭野神社と同じ頃に成立したものだと思われます。



霧島東神社



島津光久奉納の扁額

狭野神社と同じく、霧島山の噴火の被害を度々受け、天永3年(1112)、文暦元年(1234)の噴火により焼失・廃絶しましたが、文明18年(1486)、島津忠昌により再興され、以後、島津氏の庇護を受けて繁栄しました。特に島津吉貴以後には、藩主家督相続の際に白銀が献納された他、寛文6年(1666)に島津光久により額が奉納されました。

享保元年(1716)9月・12月・翌2年1月の霧島山噴火により社殿の一部や集落が被害に遭ったものの、移転することもなく繁栄しました。又、高千穂

峰は境内に含まれていることから、山に登る際には、必ず当社に参拝したと云われています。

#### 1 4. 霞権現社

『三国名勝図會』によると、入来村霞岡にあり、文化12年(1815)、薩摩藩主島津重豪の時に神事が改められ、狭野神徳院を別当とし、郡山花尾大権現社(鹿児島県郡山町)が祭祀を管轄し



霞 神 社

ました。元々は馬頭観音が祀られており、霞ヶ丘にある大きな岩が御神体とされていました。江戸時代の辺りから、丘の岩に五色の蛇が住むと云われ、この蛇は霧島六所権現の使いとされたことから、社殿こそありませんでしたが、霧島六所権現に参拝する人は、必ずここにも参詣したと云われています。

しかし、末社的な位置であったため、この他の文献には殆ど記載されておらず、廃物政策後の処遇については不明なもの、『日向地誌』には、すでに現在地で霞神社の名が登場します。

## 1 5. 鎮守神社

祭神 天照大神・豊受大神・春日大明神・大山祇神・水岡女神・菅原天神



鎮守神社

大字西麓下馬場にあります。『三国名勝図會』によると、高原右衛門篤時(元は税所氏、篤時の代に改姓)が奈良より御神体を下し、祀ったのが始まりとされています。天正4年(1576)、島津義久が高原城を攻める前に当社に参詣し、扁額を奉納したと云われています。

現在の社殿は、近年再建されたもので、傍らには、稲荷大明神、仁王像・二十三夜待碑の破片などが祀られています。

## 1 6. 王子神社

祭神 ニニギ尊・神武天皇外十神

大字広原字井手ノ上<sup>いでんうえ</sup>にあります。正確な創建年代は不明ですが、社記によると、建久年間(1190~1198)にはすでに存在していたと云われています。

現在は、神社の裏に集落がありますが、耕地整理以前は、神社の下に集落がありました。参道には、仁王像・田の神・石敢當などが祀られています。





王子神社

## 17. 鷹巣神社



鷹巣神社

祭神 水速女命

大字広原字鷹巣中尾にあります。約200年前に創建されたと云われ、昔から牛馬の神様として、広原地区をはじめ、小林・高崎・野尻などの信仰を集めています。

## 18. 鋒神社

祭神 経津主神

大字蒲牟田字中村にあります。創建年代は不明ですが、甲斐氏の祖先が甲斐国から来た際に同行した神で、後に甲斐氏が越に関所役人として転居する時、当地を動かないという託宣により、この地に鎮座した、と云われています。その後、蒲牟田一帯の産土神となり、地区の信仰を集めました。現在の社殿は昭和27年に改築され、さらに昭和47年に本殿が建てられました。



銚神社

## 19. 高松水神社



高松水神社

祭神 水速女命

大字蒲牟田字高松にあります。詳細は不明ですが、この近辺では、水神の加護により、川にまつわる事故でも怪我一つ無く助かったという話が多く残されています。

## 20. 猿田彦神社



猿田彦神社

祭神 猿田彦神

大字蒲牟田字下狭野の、狭野神社第二鳥居の近くにあります。猿田彦神社は、古くから狭野住民が奉祀していた神社でしたが、昭和33年(1958)2月18日に造営移転したのに伴い、馬頭観音を豊受姫神として合祀したものです。現在は、交通安全等の御利益があるといわれています。

## 2 1. 神徳院 しんとくいん

狭野神社の別当寺で、正式名称を霧島山仏華林寺神徳院と言い、通称神徳院、狭野寺とも呼ばれました。『三国名勝図會』には、江戸東叡山(寛永寺)の末寺で天台宗穴太派、本尊は阿弥陀如来とあります。創建年代は不明ですが、狭野神社と同じ頃に建立されました。

文暦元年(1234)の大噴火で狭野神社と共に焼失、東霧島神社勅詔院に移転し、その後は狭野神社と行動を共にしましたが、慶応4年(1868)の廃仏政策により、住持は小林郷の宝光院へ移転、寺院内の諸仏は廃棄処分、寺地は狭野神社の神主館となりました。

狭野神社のすぐ近くに代々の住職の墓地があり、狭野の新田開発などに尽力した宥淳や憲純法印などが眠っています。



神徳院墓地



憲純法印の墓石

## 2 2. 錫杖院



錫杖院墓地

霧島東神社の別当寺で、正式名称を霧島山大権現東光坊華林寺錫杖院、通称東光坊とも呼ばれていました。『三国名勝図會』には、鹿児島大乘院末寺で真言宗、本尊は千手観音座像、とあります。

創建年代は不明ですが、霧島東神社と同じ頃に建立されました。文暦元年(1234)の大噴火で霧島東神社と共に焼失・廃絶しましたが、文明18年(1486)、真言僧圓政法印により再興されました。

戦国時代の一時、伊東氏の支配下に入り、伊東方の修験者である池郷民部が管理していましたが、天正4年(1576)、再び島津氏の管轄下に入りました。その後は、享保元年の噴火の被害に遭いながらも、霧島東神社と共に繁栄しましたが、慶応4年(1868)の廃仏政策により、住持及び寺院内の諸仏は麓の法蓮寺に移転(その後廃棄処分)、仁王像は廃棄処分、寺地は東御在所神主館となりました。現在、神社の敷地の一角に墓地があり、錫杖院の代々の住持の他、島津方に殺害された池郷民部等が眠っています。

### 2 3. 瀬多尾権現社

大字広原字瀬田尾にあります。かつて霧島六所権現の一つに数えられた、瀬多尾権現社の跡と思われます。霧島岑神社(現在、小林市夷守神社に合祀)の別当寺で、成立は他の六所権現社と同じと思われます。別名霧島山中央六所権現と呼ばれ、かつては、霧島連山の奥深くに位置しましたが、度重なる噴火による焼失により、最終的に現在地に移転したと云われています。



瀬多尾権現社

廃仏政策後、最近まで度重なる被害に遭いましたが、現在は地元の人によって「バトカン」「権現様」と言われて、祀られています。

仏像などは、夷守神社に移されたそうですが、現地には仁王像の破片や、土壇と礎石、周囲を取り囲んでいる土壁などが残存しており、当時の寺域の大きさが窺えます。

### 2 4. 法蓮寺址

大字西麓字上馬場の、現在の光明寺境内に位置していたと思われます。『三国名勝図會』には、飯野長善寺の末寺で曹洞宗、本尊は聖観音、とあります。慶応4年(1868)に廃寺となりました。

### 2 5. 威徳院址

『三国名勝図會』には、蒲牟田村に所在し、神徳院末寺で天台宗、本尊は千手観音、とあります。本尊の千手観音は、当院住持であった宥仙法印が島津氏から賜ったと云われています。狭野神社近辺の、現在民家になっている辺りに位置していたと思われます。他寺院と同じく、慶応4年(1868)に廃寺となりました。

## 26. 坂本寺址



坂本寺の墓地

大字蒲牟田字高松にあります。現在の墓地の辺りにあったと云われています。『三国名勝図會』には、神徳院末寺で天台宗、本尊は阿弥陀如来、とあります。後に神徳院からは分離したようです。地頭仮屋が現在の遍照寺に出来る前は、この辺りにあったことが古文書に記されています。慶応3年(1867)、廃寺となりました。現在、住職の墓石のみが残されています。

## 27. 地藏院址



地藏院址現況

大字西麓字下馬場にあります。現在は墓地になっていますが、『三国名勝図會』には、錫杖院末寺で真言宗、本尊は地藏菩薩、とあります。ちなみに、天正4年(1576)の高原城攻めの際、城への入り口の一つに、地藏院口の名称が見られます。

慶応3年(1867)、廃寺となりました。

## 28. 真源庵址

王子神社近くの墓地周辺に位置していたと思われます。禅宗寺院で、慶応3年(1867)、廃寺となりました。

## 29. 高原寺址



高原寺の墓地

大字蒲牟田字祓川にあります。通称「こげし」と呼ばれており、『三国名勝図會』には、錫杖院末寺で真言宗、本尊は十一面観音、とあります。寺跡は現在久保田氏の宅地となっていますが、住職の眠る墓地が残り、同氏によって守られています。

## 30. <sup>こえ</sup>越の弘法大師堂



越の弘法大師堂

大字西麓字瀬口にあります。堂内には弘法大師・不動明王・十一面観音が祀られています。堂前の碑から、越の住人と云われている鍋倉八郎太が、家内安全・子孫繁栄を祈願して御堂と弘法大師像を奉納したのが始まりと思われます。

## 31. 川平の御堂

大字後川内字春君にあります。約200年前、川平氏の5代前の先祖が鹿児島より移して祀ったのが始まりとされています。本尊は、霧島大権現・山神大天宮・阿多摩支天・地蔵菩薩の4神で、御堂の中には3体の木像が祀られています。

## 32. 地蔵原の御堂

大字後川内字西ノ原にあります。御堂の中には、木像(地蔵菩薩座像?)と庚申碑のような石碑が祀られています。木像は、顔などが削られているものの、僧体の座像で、蓮弁の台座ごと